

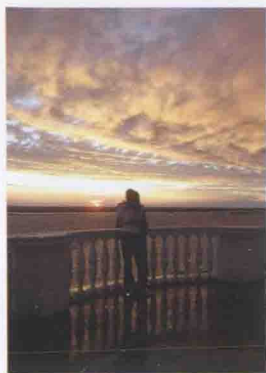
切手紀行シリーズ④

ハバロフスク

内藤陽介 著



彩流社



切手紀行シリーズ④

ハバロフスク

内藤 陽介 著

彩流社

常州大学图书馆
藏书章





著者近影（シベリア鉄道車内にて）

【著者紹介】

内藤陽介（ないとう ようすけ）

1967年、東京都生まれ。東京大学文学部卒業。郵便学者。日本文藝家協会会員。フジインターナショナルミント株式会社・顧問。切手等の郵便資料から国家や地域のあり方を読み解く「郵便学」を提唱し研究・著作活動を続けている。

主著『解説・戦後記念切手』（日本郵趣出版。全7巻＋別冊1）、『大統領になりそこなった男たち』（中公新書ラクレ）、『事情のある国の切手ほど面白い』（メディアファクトリー新書）、『切手百撰 昭和戦後』（平凡社）、『切手が伝える仏像』、『タイ三都周郵記』、『トランシルヴァニア／モルダヴィア歴史紀行』、『マカオ紀行』（以上、彩流社）他、著書多数。

主要参考文献（紙幅の関係から、日本語の単行本を中心に、特に重要な引用・参照を行ったものに限定した）

- ・阿部軍治 『シベリア強制抑留の実態 日ソ両国資料からの検証』 彩流社 2005年
- ・新井紀元・萩原海一 「ソ連併用郵便葉書の分類試案」 『いづみ』 第199号（1980年）
- ・アルセーニエフ（長谷川四郎訳） 『（東洋文庫55）デルスウ・ウザーラ 沿海州探検行』 平凡社 1965年
- ・インツァー・ハバロフスク旅行会社 『ハバロフスクのご案内』 2007年
- ・川端香男里、佐藤経明、中村喜和、和田春樹、塩川伸明、植原学、沼野充義（監修）『新版 ロシアを知る事典』 平凡社 2004年
- ・栗原俊雄 『シベリア抑留 未完の悲劇』 岩波新書 2009年
- ・講談社編 『榎本武揚 シベリア日記』 講談社学術文庫 2008年
- ・白井久也 『検証 シベリア抑留』 平凡社新書 2010年
- ・鐸木昌之 『（東アジアの国家と社会3）北朝鮮 伝統と社会主義の共鳴』 東京大学出版会 1992年
- ・内藤陽介 『北朝鮮事典』 竹内書店新社 2001年 / 『反米の世界史』 講談社現代新書 2005年 / 『満洲切手』 角川選書 2006年
- ・萩原遼 『朝鮮戦争 金日成とマッカーサーの陰謀』 文春文庫 1997年
- ・原暉之 『シベリア出兵：革命と干渉、1917-1922』 筑摩書房 1989年 / 『ウラジオストク物語』 三省堂 1998年
- ・堀江則夫 『極東共和国の夢 クラスノシチョコフの生涯』 未来社 1999年
- ・村山常雄 『シベリアに逝きし人々を刻す』 プロスパー企画 2007年
- ・Gibbons, S. Stanley Gibbons Stamp Catalogue Part 10: Russia (6th ed), Stanley Gibbons Limited, 2008

切手紀行シリーズ④ ハバロフスク

2011年11月5日 初版第1刷発行 定価はカバーに表示してあります

著者 内藤陽介
発行者 竹内淳夫

発行所 株式会社 彩流社
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2
TEL 03-3234-5931 FAX 03-3234-5932
ウェブサイト <http://www.sairyusha.co.jp>
E-mail sairyusha@sairyusha.co.jp

印刷／製本 青島日友印刷
編集 塚田敬幸
組版／装丁 坂垣由佳

©Yosuke Naito
ISBN978-4-7791-1649-0
乱丁本・落丁本はお取り替えます

本書は日本出版著作権協会（JPCA）が委託管理する著作物です。
複製（コピー）・複製、その他著作物の利用については、事前にJPCA（電話 03-3812-9424、e-mail:info@e-jpca.com）の許諾を得て下さい。なお、無断でのコピー・スキャン・デジタル化等の複製は著作権法上での例外を除き、著作権法違反となります。

第1章 アムール川もしくは黒龍江…………… 5

ハバロフスク到着……………5	ウチョース……………20
夜明けの国歌……………8	釣り人と鮭……………23
ディヤチェンコの要塞……………10	河畔からウチョースを眺める……………28
レーニン・スタジアム……………12	川下り……………30
ムラヴィヨフ＝アムールスキー像……………16	

第2章 ムズィエーイ：黒澤とチェーホフ…………… 34

ステラーカイギウ……………34	郷土誌博物館3階の展示……………47
カルーガとアムールトラ……………38	コンサート・ホール……………48
ダマンスキー島……………41	レービンとシーシキン……………52
デルス・ウザーラ……………43	チェーホフの宿……………55

第3章 赤軍…………… 60

ロシア内戦と極東共和国……………62	ウスーリースキー並木通り……………82
セリシェフ……………67	永遠の火……………85
勝利のステンドグラス……………70	戦没者慰霊碑と勲章記念碑……………90
ブリュヘル車両……………73	スパソ・ブレオブラジエンスキー大聖堂……………93
雪中のT-34……………75	

第4章 ムラヴィヨフ＝アムールスキー通り…………… 97

ウスベンスキー大聖堂……………97	中央郵便局へ……………111
内戦勝利記念碑……………102	レーニン広場……………114
帝政時代の建物が残る町並み……………105	極東国立公務員大学……………117
大日本帝国極東貿易……………108	レーニン広場のレーニン像……………120

第5章 シベリア鉄道小旅行…………… 124

エロフェイ・ハバロフ……………124	シナゴグへ……………139
シベリア鉄道とハバロフスク駅……………126	ショーレム・アレイヘム通り……………143
ピロビジャン行きの列車……………132	ピロビジャン版・東洋のユダヤ人……………147
ピロビジャン到着……………137	ハバロフスクに戻る……………150

第6章 帰還（ダモイ）—— 抑留の痕跡を歩く…………… 152

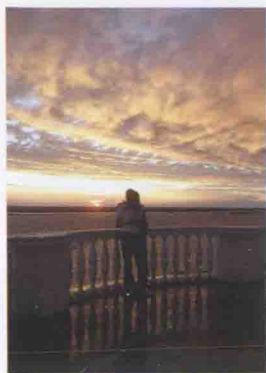
シベリア抑留……………152	樽儀と瀬島龍三……………167
シベリア抑留と郵便……………154	餅と味噌汁……………171
アムール・ホテルとディナモ公園……………162	ダモイ……………176

付：“将軍様”のふるさと—— ヴァツコエ訪問記…………… 178

金成柱のバルチザン闘争……………180	“金日成”の誕生……………186
雪原のヴァツコエ……………183	

あとがき

主要参考文献

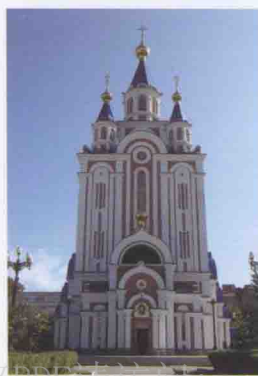


切手紀行シリーズ④

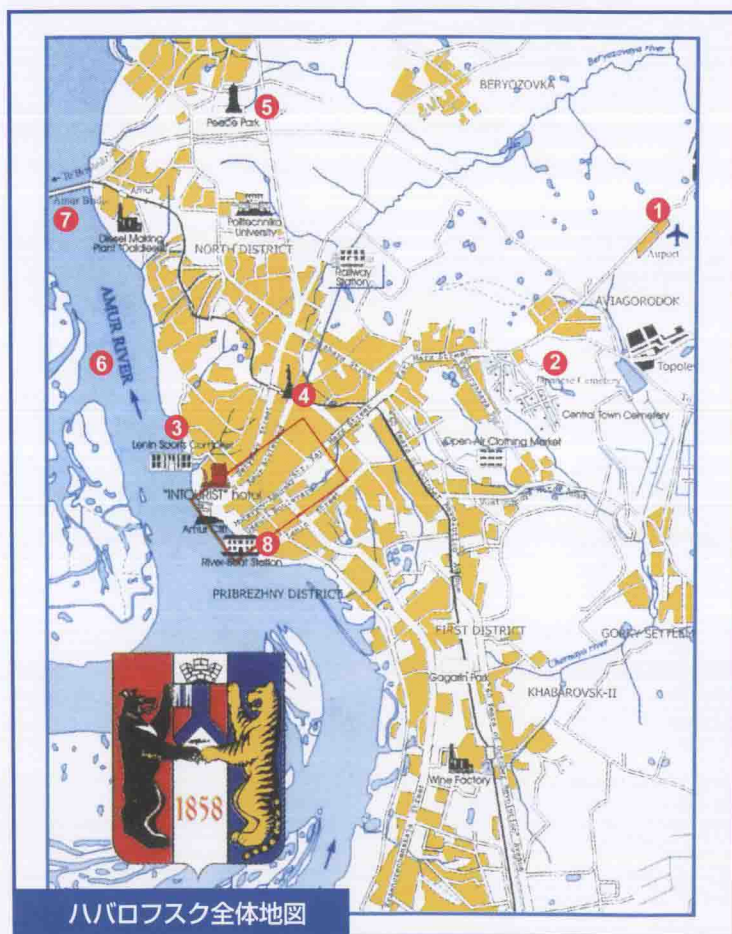
ハバロフスク

内藤陽介 著

彩流社

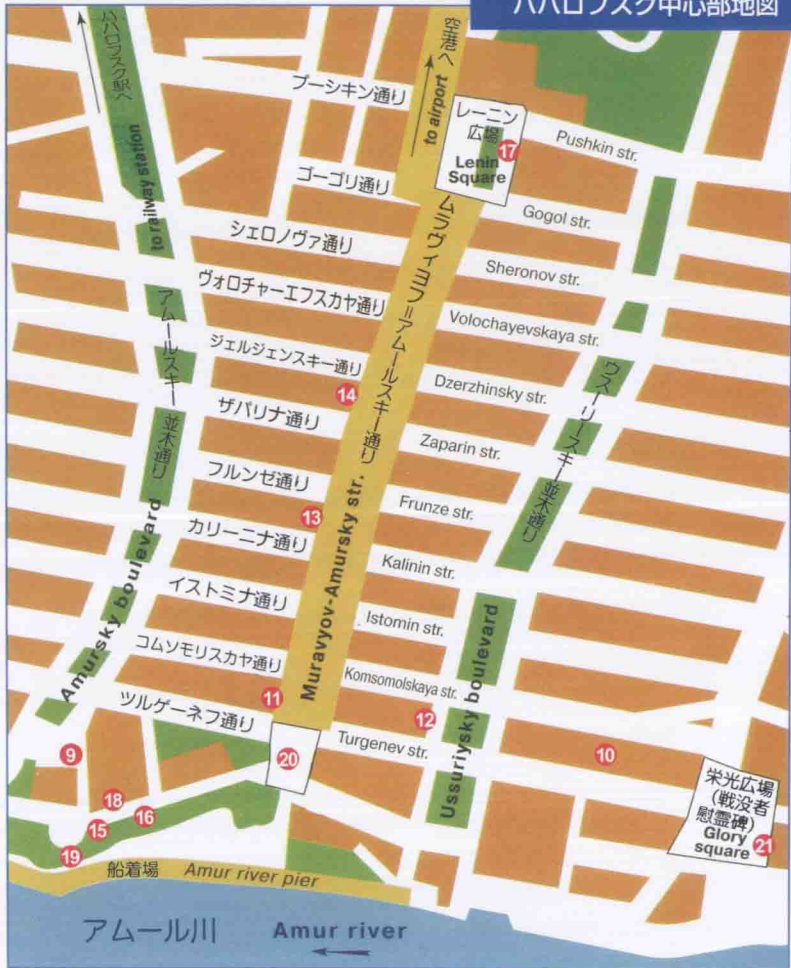


ハバロフスク市周辺地図



ハバロフスク全体地図

ハバロフスク中心部地図



ハバロフスク市周辺地図

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 ハバロフスク | 10 フローネジ・動物園 |
| 2 ユダヤ人自治州の首府ビロジヤン | 11 少数民族ナナイ人の村シカチ・アリヤン |
| 3 プリामールスカヤ村 | 12 少数民族ナナイ人の村トロイツコエ |
| 4 大ヘフツィール自然保護区 | 13 クトゥゾフカ村・野生動物のリハビリセンター |
| 5 クラスチャ・レチカ村 | 14 ホール川 |
| 6 ヴィチーハ村 | 15 撫遠市 |
| 7 カザケービチェボ村 | 16 同江市 |
| 8 アムール川 | |
| 9 ヴォロチャーエフカ村・十月大革命・国内戦争時代の戦場跡 | |

ハバロフスク全体 / 中心部地図

- | | |
|---------------|----------------------|
| ① ハバロフスク空港 | ⑫ レストラン「ルースキー」 |
| ② 日本人墓地 | ⑬ ターイヌイ・リミスラー |
| ③ レーニン・スタジアム | ⑭ 中央デパート |
| ④ ハバロフスク駅 | ⑮ 郷土誌博物館 |
| ⑤ シベリア慰霊平和公園 | ⑯ 極東美術館 |
| ⑥ アムール川 | ⑰ レーニン広場 |
| ⑦ アムール大橋 | ⑱ 極東軍管区の歴史博物館 |
| ⑧ 船着場 | ⑲ 中央公園、ウチョースと呼ばれる観望台 |
| ⑨ インツーリスト・ホテル | ⑳ 大聖堂広場 |
| ⑩ 日本総領事館 | ㉑ 栄光広場（戦没者慰霊碑） |
| ⑪ レストラン「サッポロ」 | |

第1章 アムール川もしくは黒龍江…………… 5

ハバロフスク到着……………5	ウチョース……………20
夜明けの国歌……………8	釣り人と鮭……………23
ディヤチェンコの要塞……………10	河畔からウチョースを眺める……………28
レーニン・スタジアム……………12	川下り……………30
ムラヴィヨフ＝アムールスキー像……………16	

第2章 ムズィエーイ：黒澤とチェーホフ…………… 34

ステラーカイギウ……………34	郷土誌博物館3階の展示……………47
カルーガとアムールトラ……………38	コンサート・ホール……………48
ダマンスキー島……………41	レービンとシーシキン……………52
デルス・ウザーラ……………43	チェーホフの宿……………55

第3章 赤軍…………… 60

ロシア内戦と極東共和国……………62	ウスーリースキー並木通り……………82
セリシェフ……………67	永遠の火……………85
勝利のステンドグラス……………70	戦没者慰霊碑と勲章記念碑……………90
ブリュヘル車両……………73	スパソ・ブレオブラジエンスキー大聖堂……………93
雪中のT-34……………75	

第4章 ムラヴィヨフ＝アムールスキー通り…………… 97

ウスベンスキー大聖堂……………97	中央郵便局へ……………111
内戦勝利記念碑……………102	レーニン広場……………114
帝政時代の建物が残る町並み……………105	極東国立公務員大学……………117
大日本帝国極東貿易……………108	レーニン広場のレーニン像……………120

第5章 シベリア鉄道小旅行…………… 124

エロフェイ・ハバロフ……………124	シナゴグへ……………139
シベリア鉄道とハバロフスク駅……………126	ショーレム・アレイヘム通り……………143
ピロビジャン行きの列車……………132	ピロビジャン版・東洋のユダヤ人……………147
ピロビジャン到着……………137	ハバロフスクに戻る……………150

第6章 帰還（ダモイ）—— 抑留の痕跡を歩く…………… 152

シベリア抑留……………152	樽儀と瀬島龍三……………167
シベリア抑留と郵便……………154	餅と味噌汁……………171
アムール・ホテルとディナモ公園……………162	ダモイ……………176

付：“将軍様”のふるさと—— ヴァツコエ訪問記…………… 178

金成柱のバルチザン闘争……………180	“金日成”の誕生……………186
雪原のヴァツコエ……………183	

あとがき

主要参考文献

第1章 アムール川もしくは黒龍江

ハバロフスク到着

僕が初めてアムール川を見たのは、ハバロフスクがまだ雪に覆われていた3月のことだった。

新潟県の国際交流事業の一環として企画されたモニター・ツアーで、ハバロフスクに、というよりも、ロシアに初めて行くことになった僕は、夕方の5時半過ぎに新潟空港を離陸した飛行機で、現地時間の夜9時前にハバロフスク空港に降り立った。

機内食は紙の箱に入れて配られ、食後のコーヒーは白湯とネスカフェの粉末を渡された。かつてのソ連では、ネスカフェは高級品としてもてはやされ、“ゴールド・ブレンド”は西側からのお土産の定番だったという。

空港内の職員の物腰や仕草、ホテルへ向かう途中の風景の中には、いたるところにソ連時代の空気が残っているように感じられたが、ネスカフェのステイタスが変わっていないのも、その一例といえそうだ。

入国審査をすませ、スーツケースを受け取ると、すぐに、日本語を話すロシア人ガイドに促されてマイクロバスに乗り込み、窓の外の雪景色の夜景を見ながら、宿泊先のインツォリスト・ホテルに向かう。その間、ハバロフスク時間は、日本よりも1時間早いので時計を直したのだが、海外での時差という時計を遅らせることが当たり前と思っていたので、ちょっと不思議な感じだ。

ロシア極東連邦管区・本部所在地のハバロフスクは、アムール川中流域、ウスリー川との合流点のすぐ下流に位置している。

ハバロフスクのシンボルともいべきアムール川は、支流を含めた全長4,440キロ（本流だけでも2,824キロ）、流域面積は1,855,000平方キロという、世界8位の大河だ。源流となるハイラル川は中国との国境ではアルグン川となり、ヤブロノイ山脈から東へ流れるシルカ川と合流。ここからアムール川の本流がはじまり、ハバロフスクの近郊でウスリー川と合流し、さらに東に流れて無数に曲がりくねった後、オホーツク海に注ぐというのが、そのルートだ。

中国語で黒龍江とも名づけられた、まさに龍がうねるかのごとき豪快な姿の

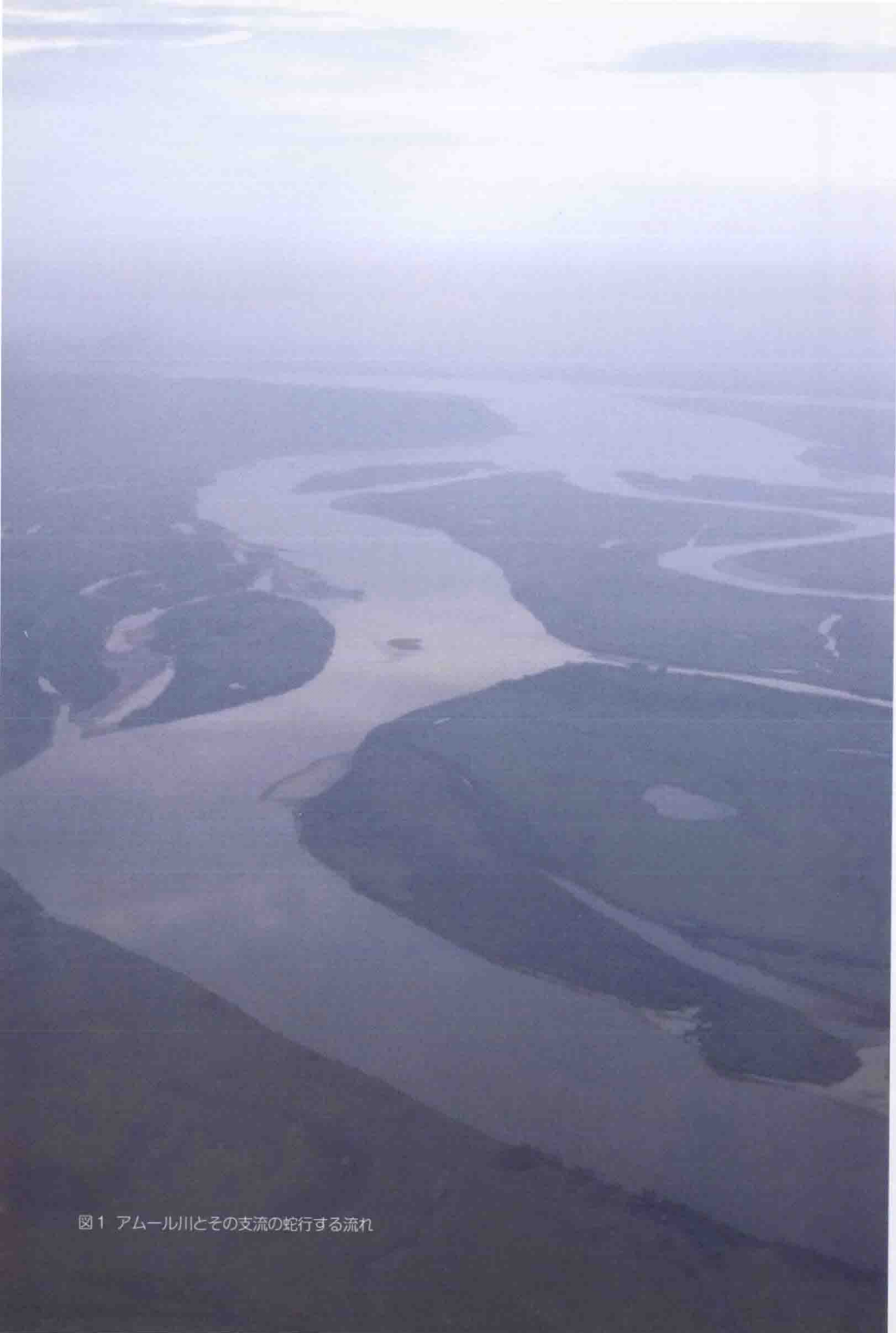


図1 アムール川とその支流の蛇行する流れ



図2 アムール造船所 35 周年の記念切手

一部は、明るい時間帯であれば、飛行機の窓からもしっかりと見ることができる(図1)。

アムール川とハバロフスクの位置関係を示す地図の切手が何かないかと探してみたところ、1967年にソ連が発行した“アムール造船所 35 周年”の記念切手(図2)がみつかった。左側の極東ロシアの地図のうち、アムール川沿いの旗が立っている場所が造船所の所在地で、その南にキリル文字でハバロフスク(ХАБАРОВСК)との表示が見える。

造船所の所在地、コムソモリスク・ナ・アムーレは、ハバロフスクから北北東へ356キロのアムール川左岸に位置している。もともとは、1860年にペルミ県出身の開拓移住農民によって開かれたことからペルムスコエ村と呼ばれていたが、1932年2月、重工業分野の諸工場が建設されることになり、コムソモリスク・ナ・アムーレ市と改称された。コムソモール(共産主義青年同盟)が街を建設したというのが建前だが、実際の建設作業を担ったのは強制労働の囚人たちだ。

切手の地図では、サハリンが大きく描かれているのも興味深い。

アムール川は満洲語では“黒い河”を意味する“サハリアン・ウラ”と呼ばれており、その対岸にある島というのが、サハリンという地名の由来だそう。なるほど、この地図を見るとそうしたことも納得できる。

なお、“アムール川”という地名は、中国語ではなく、モンゴル語でのこの川の呼び名であった“ハラムレン”がその語源だという説のほか、多量の水を意味する先住民の言葉“ヤムール”を語源とする説、ツングース語で「良い世界」を意味するアムールを語源とする説などがあるという。

ホテルにたどり着いたのは、夜の10時頃で、さっそく夕食が出た。“チャー



図3 ロシア風水餃子のペリメニ

シューときゅうり”といった風情の前菜や名物という水餃子のペリメニ（図3）などは、否が応でも、この地が中国、特に満洲とも近い“極東”に位置していることを再認識させてくれる。

食事を済ませて部屋に戻り、窓の外を見下ろすと、遠くにライトアップされたウスペンスキー大聖堂、眼下に極東美術館とシェフチェンコ通りが見える（図4）。アムール川そのものは見え

なかったが、その一帯だけは灯りが全くなく漆黒の闇に覆われており、まさに黒い龍が横たわっているかのような風情が印象的だった。

夜明けの国歌

翌朝、目が覚めたとき、窓の外はまだ暗かった。ベッドを出る前に部屋の暖房をつけておこうと思って枕元のつまみをひねって二度寝していたら、しばらくして、いきなり、スピーカーからロシア国歌が大音量で流れてきた。どうやら、エアコンではなくラジオのスイッチをいじってしまったらしい。時計を見ると午前6時ちょうど。



図4 ハバロフスク市内の夜景

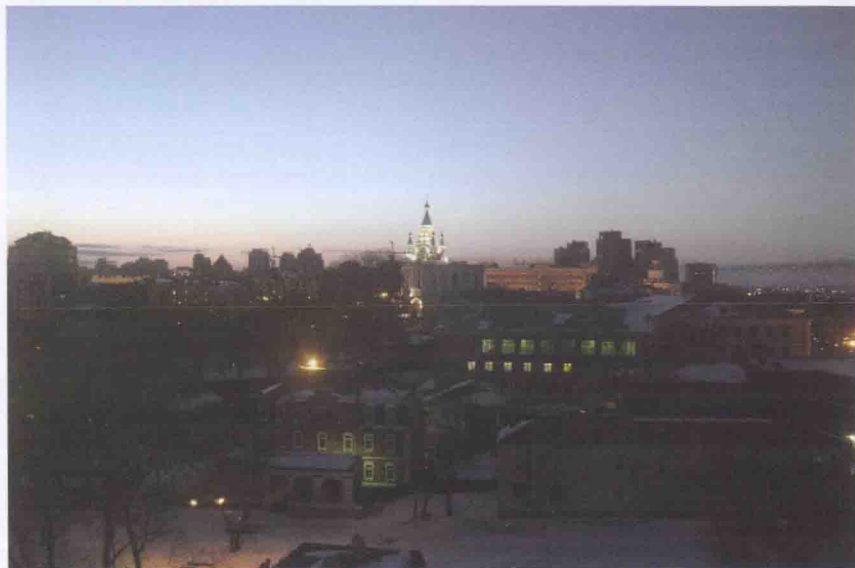


図5 ハバロフスク市内の夜明け



図6 夜が明けてライトアップも終了

現在のロシア国歌は、スターリン時代の1944年に制定された「ソビエト連邦国歌」のメロディーを踏襲し、歌詞だけを変えたものだ。

1943年、それまでの国歌であった「インターナショナル」に代わる新国歌が制定されることになり、新国歌の公募が行われた。しかし、スターリンの気に入る作品がなかったため、1936年にアレクサンドル・アレクサンドロフが作曲した「ボリシェヴィキ党歌」にセルゲイ・ミハルコフが新たな歌詞をつけ、ガブリエリ・エリ＝レギスタンの補作を経て新国歌となった。ちなみに、「インターナショナル」はこれと入れ替わりにボリシェヴィキ党歌になった。

その後、フルシチョフ以降のスターリン批判を踏まえて1977年に歌詞の一部が変更され、1991年のソ連崩壊後は一時国歌ではなくなった時期もあったが、2001年、旧ソビエト連邦国歌の歌詞を修正したものが、あらためて、ロシア連邦国歌として採用されている。

もっとも、ロシア語のほとんどわからない僕にとっては、歌詞の違いはあまり重要ではない。部屋中に響き渡る国歌のメロディーを聴いていると、赤の広場での軍事パレードのニュース映像を思い出して、条件反射で背筋を伸ばしてベッドから起き上がってしまった。

僕が暖房をつけなくても、部屋の中はしっかりと暖まっていた。冷静に考えてみれば、冬のハバロフスクで、ホテルの部屋に暖房が入っていないということとはありえない。

窓の外を見ると、東の空がちょうど明るくなりかけたところ(図5)だった。少しすると、ウスペンスキー大聖堂のライトアップが消されたが(図6)、すぐに街中には朝日が満ち溢れてきた。

そんな景色を眺めていたら、いつの間にか、朝食のビュッフェが始まる朝7時になろうとしていた。シャワーを浴び、セーターに着替えて、僕は階下へ降りていった。

ディヤチェンコの要塞

アムール川の手前はちょっとした丘になっていて、宿泊先のホテル、インツェリストはその川とは反対側の中腹にある格好だ。

この丘の上から川岸までのスペースに設けられた「文化と休息の公園(通称:ムラヴィヨフ＝アムールスキー公園)」はハバロフスク市内で最も古い公園で、第二次大戦後は日本人抑留者がその整備作業に動員され、ほぼ現在の姿となった。

園内のウチョース（絶壁）と呼ばれる展望台がアムール川を見下ろす絶景ポイントとなっており、観光客は必ず訪れる場所だ。

展望台を目指してホテル前の坂道を下りていくと、まずは、精悍な顔つきのヤコブ・ディヤチェンコ像（図7）が門番よろしく立っている。

1858年5月28日、ロシアは清朝とアムール川中流の璦琿で条約を結び、1689年のネルチンスク条約以来、清国領とされてきたアムール川左岸をロシア領とし、ウスリー川以東の外満州（現・沿海州）を両国の共同管理地とするとともに、アムール川におけるロシアの航行権を認めさせた。



図7 ヤコブ・ディヤチェンコ像

これを受けて、さっそく5月31日、ディヤチェンコ大尉ひきいるロシア国境警備隊（東シベリア第13大隊）は、アムール川を東進してアムール川とウスリー川の合流地点近くに上陸。そこに要塞を設置し、この要塞を17世紀のシベリアの探検家、エロフエイ・ハバロフにちなんでハバロフカと命名した。これが現在のハバロフスクの直接的なルーツである。ちなみに、現在のようにハバロフスクという地名になったのは、1895年に市制が施行されてからのことだ。

高さ4メートルの銅像は、ロシア美術アカデミー出身の彫刻家、アレクサンドル・ルコビーシュニコ（代表作はモスクワのドストエフスキー像、皇帝アレクサンドル2世像など）の作品で、2008年5月、ハバロフスク150年祭の記念事業の一環として、かつて要塞があった、まさにその場所に建てられた。



図8 レーニン・スタジアムを取り上げた1969年の絵葉書

レーニン・スタジアム

ディヤチェンコ像の下をさらに降りていくと、丘のふもとにレーニン・スタジアムの南門が見える。

ソ連時代、レーニンの名を冠したスポーツ施設が各地に建てられたが、ハバロフスクのレーニン・スタジアム(図8)は1957年に完成したスポーツ・コンプレックスだ。広々とした公園の中に6,000人収容の体育館、25,000人収容の競技場、テニスコート、ヨットクラブなどを備えたその規模は、極東ロシアのスポーツ施設としては最大のものだという。

槌と鎌のエンブレムやスポーツ勲章の装飾がついた、いかにもソ連時代を彷彿とさせる南門(図9)から中に入ると、冬には雪景色が、夏には青々とした木立が広がり、散歩コースにはうってつけた。

3月の時はツアーだったのでスタジアムの敷地内には入れなかったが、8月にここを訪れたときは個人旅行だったので、少し、敷地内を散歩してみた。

南門に近い体育館の前では、ミット打ちの練習に励む若きボクサーが汗を流していた。こちらの気配を察すると、写真はだめだと手振りで制された。こっそり撮影してしまおうかとも思ったが、相手を怒らせて拳が飛んできたら冗談では済まないの、おとなしく男女のスポーツ選手の像が立てられた体育館(図10)の



図9 レーニン・スタジアム南門から見た冬景色



図10 レーニン・スタジアム敷地内の体育館